選択教科目の履修単位数をより多くしたい理由は，今後の高校は，実質的に全入時代をむかえて，さまざまな要求，能力，特性をもつ生徒たちをむかえて，生徒達それぞれの可能性を十分に伸長する機会を増大すべきだからである。

履修単位数の多少の問題だけではなく，必修教科目，そして選択教科目のそれぞれの内容や取扱いについても，やはり変革が必要だとおもわれる。

まず，＜必修教科目について＞，― これでは，弾力的な取扱いが，とくに重要な課題であろう。

共通履修の必修教科目といえば，それら科目内容が全生徒にたいして共通で同一であるのが，原則であり立前ではある。だが，さまざまな能力や特性に分布した生徒たちという状況にあって，かなり高い水準の必修教科目内容を厳格に画一的に学びとらせることは，きわめて困難であるだけでなく，妥当とはいえない。

これが妥当といえないわけは，これではかえって生徒たちが教材の犠牲になるからである。生徒が教材のためにあるのではなく，その逆に，教材は生徒のためにあるべきだ。生徒たちの成長に役立ってこそ，教材が教材となりうるのである。また考えれば，必修教科目の内容は，国民的なミニマム・エッセンシャルズであり，その高次部分である。ところで国民的なＭＥとは，国民社会の文化要求を基底としつつも，これを国民各自がその主体軸による変換をほどこして把持すべきものであり，したがって画一的であるを要しない。

これらの理由によって，必修科目の内容は，画一的であるを要せず，弾力的な幅をもたせて取扱ってもよい。たとえば必修科目「数学１」（４単位）を，ある場合には，３単位にしたり，半分の２単位を類似科目の２単位で代替したりして，履修単位数に弾力性をもたせる。またときには，指導時間を標準以上に多くして，ゆっくり学びとらせるとの方法上の弾力性をもたせる，など。こうなると，学級解放によるグルーピングまたは到達度によるクラス分けが問題になってこよう。

つぎに＜選択教科目について＞，― ここでは科目の多様化と下からの類型づくりが，特に必要である。

実質的に全入時代となり，さまざまな生徒達のいろいろな関心や要求や能力や特性に即応して，専門的～個別的な芽生を十分に伸長させたい。このためには，選択教科目を，現行よりもさらに多様化し豊かにすることが必要になってこよう。たとえば人間研究にかんするもの，コミュニケーションや情報処理にかんするもの，現代科学の入門的なもの，美的鑑賞にかんするもの，生活科学にかんするもの，など。これらについて，既往の科目観念にとらわれないで，新しい発想の科目を創出して，多様で豊かな選択科目を準備することが望まれる。

これら諸教科目の選択履修に当っては，なるべく下からの類型づくりをすることが，今後は必要になってこよう。すなわち生徒たちの自主的な選択を大切にし，これらをグルーピングすることによって，類型分けをつくるとの行きかたである。これまでは，いくつかの固定した類型を，上から生徒たちに当てはめることが多かった。今後は方向を逆にして，なるべく下方から類型づくりをすることが，望ましい原則になってくる。

最後に，今後の高校において，大学進学希望の生徒達をどう位置づけるかは，軽視できない重要問題である。全生徒の約50％近くを占める彼らの大学進学のニードは，やはり十分に生かされ尊重されねばならない。だがそれは，受験教育というような安易で近視眼の方法によってではなく，まともな意味での＜アカデミックな類型づくり＞をすることによって，達成さるべきであろう。

〔Ⅵ〕附属学校のあり方

大　西　誠一郎

（昭和37年４月～同40年３月学校長在任）

「附属学校のあり方」いかんという問題は，いろいろな側面から考えることができようが，その一つは，入学者選択の問題であると思う。その学校に，どのような生徒を入学せしめるかは，その学校の教育のあり方を大きく左右するからである。そしてそのことは，広く日本の各地にある附属学校に関する問題であるが，名古屋大学の附属学校に関する限り，その問題の基本原則は比較的はっきりしていることである。

岡崎高等師範学校時代，その問題は早く論議された。それは，附属学校創設の時期であったし，戦後の民主

主義を志向する教育の中で，附属学校のあり方が自由に討議され得たからであった。そしてまず第一に，附属学校は少数特権者のエリートのためでなく，各地域にある学校と同様の生徒を収容することが絶対必要条件であると主唱された。

私の記憶する限りでは，細谷俊夫教授はその主唱の代表者であったが，教授会はその理念に賛同して，内部的には全く抵抗なく実現されることになった。しかし，外部では，その考え方がそのまま受け容れられたとは思えなかった。附属中学校の無作為抽せんという選抜法は，毎年ニュースとして取りあげられた。また，子どもをもつ一部の親には，県内にある他の附属学校よりももっと優秀な生徒を集めうる背景をもっている名大附属校に，競争試験による入試選抜法を期待する声もあった。私が校長をつとめた時点においてさえ，そうした声は絶えずきかされた。

ある時私は校長室で二人の父親の訪問をうけた。そして，現在の附属学校の教育を批判して，結局受験体制の強化を求められた。“クラブ活動を止めてほしい。体操や音楽，美術なんか止めてほしい”というのである。その理由は余りにもはっきりしていた。“私の子どもは大学へ入ることが第一の目標です。高校ではいらん勉強しても，大学へ入学できなければ何にもならない。無駄な高校生活を送らせたくない。”と，きわめて単純な理由であった。

私はその応待にそれほど苦労はしなかった。“音楽なんかとはなにか”と応酬した。そして，“どうしても現在の附属学校のあり方が不服ならば，お引き取り願うより仕方がない”と，切り返えせばよかったのである。

附属学校教官の間では，さすがにこうした問題を正面から取りあげられることはなかった。しかし，名大の附属学校でありながら，名大に入学しうるものがきわめて少数であるという事実の前に，何か“意気あがらず”という感慨はどうすることもできなかった。

現在，全国の附属学校が，具体的にどのように運営されているか，詳細な事実は知らない。ただ，しばしば報道されるように，某国立附属学校が依然として東大合格を誇っている現状は，既有の事実の前に，改革がいかに困難であるかを感じさせるのである。そして，その事実の蔭に，依然として附属学校のあり方に自己批判する力の欠如している人の多いのにおどろかされるのである。

附属学校こそ，現代の入学試験制度がもたらす弊害をもっとも深刻に受けとめるべきである。その上に立って，国立の附属学校こそ，真実の人間形成の教育にあらゆる努力を傾けるべきではないだろうか。学生の教育実習の場としての附属学校の意義は，ほとんどなくなってしまった。現在の時点で，附属学校に存在の意義がありとするならば，それは，真実の人間形成のための実験校であるという点に帰するであろう。

現代の生徒は，入試合格という目標に向かって“体当たり”しているといわれる。そしてそれは，あらゆる困難に堪えぬく力を養うのだともいわれる。しかし，果たして生徒たちは，文字どおり“体当たり”しているといえるのだろうか。そこにあるのは，身体的活動を抑え，感情と情操とを犠牲にして，ひたすら頭の中に知識を蓄えることに専念している姿だけしかないのではないか。体当たりではなく“頭当たり”にすぎないのである。全人格的な存在感をその努力によって確認することなどは，望むべくもない。友情は生れないし，協同することは誠に不得手である。個人プレーはできても，協力することのよろこびを知らない。

同性同志の間に友情の育たないところでは，H・S・サリヴァンの指摘するように，異性に対する適正な愛情を育てることもできない。同性同志の間に友情が育つ間に，その友人とよろこびを共にし，悲しみを分ちあうことを体験していく。自分と同じように感じ，同じ体験をもち，同じ不安を未来に向かって投げかける友人がいることの体験は，青年期にようやく体験されることなのである。ところが，そうした同性同志の間に友情を育てることのできない青年は，異性に対しては，それをただ性的欲求の対象としてだけしか見ることができないのである。青少年に見られる性的非行の多発も，その源を現代教育のあり方に求めることができる。

現下中等教育の課題は，いろいろな側面から論じられるであろうけれども，名大の附属学校は，入試一辺倒，学歴偏重の社会に抗して，真実の人間形成の教育に賭けるべきであろうと思う。

附属学校のあり方はもちろん，入試選抜法だけの問題ではない。しかし，そのことを抜きにして，附属学校のあり方を論ずることはできないのである。30年余，名大附属がその制度を守りつづけて来たことは，それだけで大きな役割りを果たしたのであるけれども，その事実の上に立って，さらに真実の教育の効果を実証して行かねばならないのである。

そこには，新しい教育目標の確立の問題もあろう。その目標達成のための教育方法の検討の問題もあろう。人間評価の問題もあろう。私は今ここで，さらにそれらの点について述べることはできないけれども，附属学校は，これらの問題を教育の原点に立ちかえって検討し実証することが，実験学校としての附属学校の任務であると思う。